
disappear 2

黒土 計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

d i s a p p e a r 2

【Nコード】

N 0 1 9 0 J

【作者名】

黒土 計

【あらすじ】

去年の12月末。

初めて行ったライブハウスで出会ったバンドマンと途中までHした主人公17歳の優奈。

携帯電話だけが頼りの遠距離恋愛を始めるけれどファンの嘘で悲しい思いをしたりと色々な障害発生！

でもそれ乗り越えて8ヶ月目。やっと2人は結ばれるはずだったのに……。

今までの2人に起こった事は障害とも不運とも呼べない全て他愛のない程度の事。

この恋の行く末も、主人公が壊れていくのも全て運命で決っていた事!?

どこにでもいる普通の女の子だった頃の主人公「disappear」の続編です。

1作目を見ていなくても判るように拙い文章&更新も遅いですが・・・。

なるべく投稿できるように頑張ります。

1作目に続いて2作目もかなりの長編予定。

どうぞ気長にお付き合いくださいませm（m

待ちぼうけ（1）（前書き）

出会いから8ヵ月。「こんどは最後までHしような！」そう約束したのに、連絡が来ないまま迎えたライブ当日。終了後ファンの子に隠れて出て来たYUIちゃんと少し話をしたけれど、本題に入る前にファンの子に見つかってしまい途中で中断。1番聞きたい事を確認しようと待っていたけれど、どんどん増えてくるファンの子を蹴散らすYUIちゃんに「お前もだ！帰れ！」と指を指されてしまう。立ち去り際に「風邪引くぞ」と頭を叩かれたけど……。アノ場を乗り切るためだね？本当に帰れて事じゃないよね！？私どうして良いのか判らないよー！！

待ちぼうけ（1）

高速沿いのラブホテル。

去年の12月末に出会ってから約8ヶ月。

やっと会えたYUIちゃんの温もりに。

他の子には見せない優しい笑顔に。

絶対に泣かないって決めてたのに涙がこぼれるほど幸せな時。

途中までだった関係を超えて、2人は結ばれる…

【ハズだったのに！】

今私がいるのは機材車のあった場所に路駐された車の陰。

YUIちゃんがしゃがんでいた歩道に1人座り込んでいた。

「今日は打上げ無し！明日はするからよ！」

そう大声で叫んだ篤君の声と、惜しむ女の子達の声が今さっきの事のように頭に響く。

【風邪引くぞ】

その一言だけで、あとは何も言われなのまま。

何もないまま。

YUIちゃんはライブハウスから出てきて即車に乗り込んで去って行った。

今日会ったばかりなのに、仲間のようにつれてくれたエリゴン達はいつもの打上げ場所になっている居酒屋に移動。

私1人。もうすぐ友達が迎に来ると嘘を付いて1人残った。

ライブハウスの従業員も私に気付く事無く全員帰っていった。

多分あれが終電時間。

携帯で話しながら駅方向から歩いてきた女の人に勝手に悲鳴を上げられたのが最後。

それから人所か車すら通らなくなった。

未だにかかってこない電話。

かけるか待つか悩んで、かかって来る方を選んだのが失敗の元。

メンバーが側に居たら出てくれないかな。

運転中だったら危ないよね。

今かけたら迷惑かな。

あと10分したら。

15分になったら。

そんな事を何度も思いながら、気が付けば日付けは変わり時計は0時14分。

逆にかけるタイミングを完全に失った。

最後の力を振り絞ってか。

さっきまで泣き喚き、のた打ち回ってた蟬もライブハウスの前に転がったまま動かなくなった。

「君に賭けてたんだけどな」

【もしも】

どこかに飛び立てたなら私もここから立ち去ろう。

道も分からないけれど。

どこに何があるのか見当も付かないけど。

兎に角この場所から去る勇気を託してた。

最後に鳴き声を聞いてどのぐらい時間が経ったのだろう。

終わりと言っても、季節的にはまだ夏のはずなのに肌寒いを通り越して身震いさえする冷え込み。

体育座りをして肩をさすると温かさを感じたと同時に徐々に頑張つて待つ気持ちが生まれてきた。

1番温かく感じたのは胸。

自分の吐息でどんどん温かさを増して行く。

そして頬に火照りさえ感じた瞬間。

急に今夜触れるはずだった温もりに思いが重なって、堪えていた涙が溢れてきた。

「帰れ」って、あの場面を切り抜ける為にじゃなかったの？

電話でもメールでも直接言ってくれば良いじゃん。

あんなんじゃ判りにくいよ…。

駅前に行けば24時間営業してるコンビニがあるかもしれないけど

突然YUIちゃんが戻って来るかも知れない。

その時、ここに居なかったら帰ったと思われるかも知れない。

今の時点で時間は一時半過ぎ。

そうになったら、寝てると予想されて電話はないかも知れない。

もう少し待とう。

もし明日の場所に移動してる最中だとしても電話ぐらいはきつと来る。

その時ずっと待ってたって知ったら。

私がどれだけ会いたかったのか。

YUIちゃんに私の気持ちさえ伝われば、それだけで良いと自分を励ましながらずっと待ってた。

最後に時計を見たのは午前3時前。

あれから、どれだけが過ぎたのだろう。

いつしか、その思いは崩壊し頑張れなくなった。

（もう諦めて帰ったら？）

（YUIちゃんも会いたかったけど、今日はダメだったんだよ）

どうして良いのか判らず何かに縋りたい思いで生まれた気持ち。

最初は慰めてくれるかのように優しい口調だったのに。

いつしか気持ちちが人格を持ち暴走してくる。

（今日の日の為に新しい洋服まで買ったのにね！）

（下着も買ったんでしょ！馬鹿だよ！）

気になってた事。

確信できないけど、何故かそう感じた事にまで土足で踏み込んでくる。

（YUIちゃんは誰かと比べてたんだよ）

ファンの子にバレないように話している時に感じた下から上まで品定めするようなYUIちゃんの視線と溜め息。

（あの車に別の女が乗ってたんだよ）

機材車が発進したと同時に、遠くでゆっくりと動き出した1台の車。

誰も気にしてなかったけど、まるで前を先導するかのように私には見えた車。

鳥肌が立ち、言いようのない不安さえ感じてた。

（今頃、その女とヤッテンダヨ！）

違う。

（だから途中から連絡して来なかったんだよ！）

違う！

（現実を受け止めなさいよ！他に女が出来たんだよ！）

違う！違う！絶対に違う！

何もかも、ただの勘違い。

私の被害妄想。

「あゝ！もうヤダ！」

長く感じる時間と寒さに勝手に思い込んだだけ。

誰かに電話したいけど、こんな時間に出る子なんて居ない。

「こんな時に、相葉さんが生きていたなら……。」

YUIちゃんへの純愛を貫く為に、封印していた気持ちが溢れてくる。

生きてたら今頃相葉さんに慰めてもらえたのかな……。

ねえ。相葉さん？

幽霊でも良いから私の前に現れてよ。

天国に行けなかったの？

親よりも早く死んでしまうと、やっぱり賽の河原って所に行くの？

そこからYUIちゃんが今何してるのか教えて欲しいの。

教えてくれた代わりに私の命が短くなるとか、そういうのってあるの？

あったとしても構わないから今すぐ教えて欲しい。

そう心で強く願った瞬間

「あの………。ここで何してるんですか？」

YUIちゃんでも、相葉さんでもない男の声が聞こえた。

顔を上げると1人の男の人が立っている。

きつとコノ人は死後の世界から来た使徒。

何故かそう勝手に思い込んだ。

「もしかして幽霊さんですか？」

「は？……ユウレイ？」

「違うんですか？」

「ユウレイって、お化けとかの？」

「違うんですか？」

「はあ……違いますか……」

何の隔たりもない黒の半袖Tシャツにジーンズ。

年は20代前半か。

痩せ型で失敗したとしか思えないほど細い眉毛。

夏なのに肌も青白くて引きこもりっぽい感じ。

クラスに居たら顔のランクは下でも最下位ランク。

女子より弱そうな感じで、話し方もノツソリした気持ちの悪いヤツ。

何かに例えたならモヤシ。

「ナンパならお断りします。他を探してください」

幽霊じゃなければこんなモヤシ男に用はない。

そのまま、また私は俯いた。

「いや。ナンパじゃないんですが……」

一向に去ろうとしないモヤシ男。

「もう一体何なんですか！？私に何か用でもあるんですか！？」

行き場所のない自分の感情の捌け口を見つけたと言わんばかりに攻撃的になってた自分。

「あの……」

「あのーあのーって！さっきから気持ち悪いんですけど！男なら、さっさと喋りなさいよ！」

一撃必殺。

そんな勢いで言わなきゃ良かった。

モヤシ男の目的は、別にナンパでもなく。

私が座り込んでこの場所に止めてある車の所有者。

私がどかなければ運転席側のドアを開けられない為なだけ。

「ごめんなさい！本当にごめんなさい！」

「判って頂ければ・・・」

「酷い言い方までして本当にゴメンナサイ！」

「じゃあ、僕はここで・・・。あの・・・どうしました？あの・・・」

「何でもないの！ないけど・・・」

本当に何でもなかった。

しいて言わなければならぬのなら。

何か理由を付けなければいけないのなら、

いつの間にか去ってはイケナイって自分の中で決め事になってた場所を離れてしまった事に気が付いただけ。

YUIちゃんがしゃがんでた場所。

どうして良いのか判らなくて、ずっと去れなかった場所。

そこから離れてしまった自分に涙が溢れて止まらなくなったた。

「あのー……。大丈夫ですか？」

「大丈夫です。」

「そうですか……。じゃあ、僕行きますよ？」

ふいに閉めてしまったドアを開けたモヤシ男は何も悪くない。

悪いのは、きっと私の運。

もやし男にも、その悪運が降りかかっただけ。

「近いですね……」

もやし男を足止めするかのよう突如響いた暴走族の爆音とパトカーのサイレン音。

「ここに居ると危ないですよ？連れ去られちゃったり……」

「来ないですよ。きっと」

「散ってるみたいだから、パトカーとか巡回してくるかもしれないし」

「来たら隠れますから」

「そうですか？じゃあ・・・今から何て言います？」

「今？」

そのまま、もやし男とはサヨナラする気だった私。

YUIちゃんの事で頭がパニックして周りが見えてなかった。

顔を上げると消灯したままのパトカーが1台。

2人の警察官が降りてくる最中だった。

「こんばんわ！」

「こんばんわ・・・」

年輩らしい声の警察官ともやし男が挨拶を交わしてる。

「こんばんわ！」

警官が私にも挨拶を求めている。

「こんばんわ？挨拶ぐらいしようじゃないか。それとも何か・・・」

挨拶出来ない理由。

もやし男は私が未成年だって判ってるだろうか。

声を交わしたら。

顔を見られたら、未成年だとバレテ補導されるかもしれない。

とっさに、しゃがみ込んで顔を手で覆ってしまい逆に警官の不信感を買ったはずなのに。

「もう大丈夫ですよ」

もやし男の声に顔を上げるとパトカーはすでに去った後だった。

「こっち来ませんか？」

そう言ってYUIちゃんが居た場所から少し離れた所に座り込んだもやし男。

「僕で良かったら聞きましょうか？」

「帰らなくて良いの？」

「僕ですか？無職なんで。」

「でも」

「朝まで暇だし。別に迷惑じゃなければ・・・」

「私が迷惑かけてるんですけど」

「そうでしたっけ・・・？」

「そうですよ」

「僕はただ、女の子の気持ちって言うんですか。本心ってのを聞いてみたいだけなんですが」

「人と接する機会がないからですか？」

「え・・・？」

「引きこもりなんでしょ？」

「何か誤解されてるような・・・」

「違うんですか？女の子とはネットでしか会話した事ないですって感じなんですけど」

「初対面なのに、毒舌なんですネ・・・」

怒る事もなく、ただ苦笑いするだけのもやし男が何を考えてるのは判らないけど。

変な気起こされたら撲ってしまえば私でも勝てる気がして。

誰でも良いから聞いて欲しかった私の気持ち。

YUIちゃんが居た場所に戻り座り込んで、もやし男に話し始めた。

「あのね・・・」

「うん」

「何て言ったら良いのかな。何て言ったら・・・出会いから言えば判ってもらえるかな。」

「良いですよ。今出てくる言葉だけで。例えば何でココに居たのかからでも」

飛び散った気持ちを1つずつ拾い集めて

先に進んだり後戻りしながら少しずつ繋がって行く。

最初は私もメソメソ話して。

モヤシ男も静かに聞いていてくれたけど。

「ゴッド知ってますよ！昨日ココでライブしてたゴッドですよね！」

「え？知ってるの？」

「マジで！？優奈ちゃんって、あんな怖い方々の誰と付き合ってるんですか!?!」

「えゝ？何か以外！何でゴッド知ってるんですか？」

「一応私もバンドをやってるんで」

「え？そうなの？そんな感じしないんだけど」

「見えませんか？」

「どんなバンドなの？」

「一応ヴィジュアル系を・・・」

「余計に見えない！」

「え・・・？そうですか？」

「だって、何かモヤシみたいだし」

「モヤシって初対面でそんな・・・」

「じゃあ、一旦木綿の方が良い？」

「一旦木綿でもなく、一応私にはれっきとした名前がありますので・
・・・」

「じゃあ、何て呼べばいいの？」

「瞬しゅんと申します。」

「それって本名なの？」

「本名ですが何か？」

「瞬しゅんって感じるする！」

「そうですか・・・？」

「誰でも瞬殺できそうだもん！」

「それって嬉しくないのですが・・・」

瞬君と話しているうちに、いつの間にかYUIちゃんに会えなかった事も。

ついさっきまで泣いてた事も忘れて、元氣まで取り戻していた自分。

「そう言えば！さっきどうやって追い払ったの？警官に何にも言っ
てなかったよね？」

「えーと。手で」

「手で？」

小指を立てて、両手の人差し指を頭に立て

「彼女が・・・怒ってる・・・って」

「えー！？私が、アナタの彼女って思われてるの！？酷くない！？」

「いや・・・。そんなに拒否ラレルとショックなんですが・・・」

同級生の男とは違う存在。

YUIちゃんとも。

死んでしまった相葉さんとも違う。

何でも言えて何でも聞いてくれる人。

空の色に変化を感じ出した頃には、泣いてた自分を他人事のようにさえ感じて全く違う話ばかりしてた。

「朝が近づいてきたね」

「ですね。」

「昔トキ君と一緒に見た色になるかな」

「まさかりザードマンのトキさんですか？」

「そうだよ。」

「お知り合いなんですか！？僕めちゃうちゃファンなんですよ！」

「知り合いつて程じゃないよ。さっき言った話だよ」

「友達にメンバーとの乱交に何にも知らなくて連れて行かれた時のつてやつですか？」

「そう。ずっと一緒に話してくれてたのがトキ君なの」

「へえ……あの優奈ちゃん？」

「何？」

「今更ですが、寒いし車の中で話しませんか？」

「良いの！？って言うか本当に今更だよ！だって、もう始発の時間だし！」

「じゃあ、駅まで送って行きますよ」

優しい気遣いに乗り込んだ助手席から降りるのが淋しくなった自分。

「携帯番号教えてよ。今日電話してあげるから！」

「今夜ですか？」

「そう！絶対に電話するからね！」

「はあ・・・わかりました」

「はあ・・・って何！？嬉しくないの！？」

「嬉しいですよ？光栄でゴザイマス」

無理やり交換した携帯番号。

「絶対だからね！約束だよ！」

駅に向う途中に振り返って大声で瞬君の車に向って飛び跳ねてた自分。

瞬君との時間が楽しくて、今まで感じた事がないほどの戸惑いも切なさも。

泣いた時間も何もかも忘れて乗り込んだ始発の電車。

あんなに拘った場所から立ち去った自分に気が付いたのは3つ目の停車駅を発車した時だった。

会えるのを楽しみに待ちわびた日々が急に頭を過る。

未だに連絡のない携帯の画面に一気に蘇る感情。

泣き過ぎで頭痛さえ起こった乗り換えの駅。

気持ちに整理がつかないまま自分が住む町の駅に到着した。

泣きたいけど、誰かに見られたらと涙を堪えて必死に漕いだ自転車。

誰にも会わずに真っ直ぐ部屋へ行きたかったのに玄関を開けた途端

一番会いたくなかったお母さんに見つかった。

「ちょっとお昼過ぎて言ったじゃない！こんなに早く帰ってきたら、近所の人に何言われるか判らないじゃないの！」

「誰にも会ってないから大丈夫だよ」

「何？泣いてるの？ちょっとアンタ何かあったの！？」

「何にもないって！気のせいじゃない？」

「本当にでしようね！あゝ！もう朝から気分が悪くなる！」

「私のせいじゃないじゃん！」

「アンタのせいよ！」

「何だ。朝から騒々しいと思ったら、やっぱり優奈か。」

「お父さんまで、やっぱりって何！」

「皆思ってるのよ」

「そうそう姉ちゃんはや病神ってね。マジ朝から勘弁して下さいよ。俺の運氣までブツ下がっちゃう」

「はあ！？アンタに言われる筋ないんだけど！」

「もう優奈は部屋に行ってちょうだい！みんなアンタに構ってる暇はないの！」

「何で！？勝手に騒いだのは、お母さんだよ！？」

言われたい放題で苛立ち倍増。

「もう一体今日は何なの！？」

何もかも予定通りに進まない我人生17年間で1番最悪な日だと位置づけた朝。

私の運命の中で大切な人に巡り合ってた何て。

コレッぽっちも思っ
てなかった。

待ちぼうけ(2)

もし、YUIちゃんから電話がかかってきたら。

全く気にしていないフリをするべきか。

泣いて会いたかったと素直に言った方が良いのか。

それとも怒った方が良いのか。

自分から電話をかける。

かけない。

「もう優奈やメナサイ！何なの！？その食べ方は！」

「一体お前は何をしてるんだ？」

夕食に出された冷麦を1本1本食べて、最後に残った方にかけてよう
と思ったけど。

一向に残り何本か見えて来ない味気ない白い軍団。

口に運ぶ気力まで薄れてきた。

「何かイライラしてくる。俺もうゴチソウサマで良いや！」

「こら裕貴！ちゃんと食べなさい！あゝもう優奈！早く部屋に行きなさい！」

お母さんに促されて食卓を立つけれど、何の解決もしない私の心。

「そのまま永久に出て来るなよ」

「裕貴も一々口に出さないの！優奈が怒って残ったらどうすんのよ！」

世界一ムカツク弟に何を言われようが気にもならない。

YUIちゃんに会った時間からまだ24時間。

されど24時間。

未だに連絡が来ない状態に私の心は心底落ち込んだ。

22時には来る。

23時になったら自分からしよう！と意気込んで消沈。

時計は0時を過ぎ、約束の日から丸1日が過ぎてしまった。

（会えなかったのに何とも思っていないのかな・・・）

眠ろうにも眠れない行き場のない気持ち。

少しでも違う事を考えたくて深夜1時過ぎ。

瞬君に電話をかけてみた。

ありきたりな挨拶にも奇妙な間。

数時間前に会った時と変わらない瞬君の声が聞こえる。

「電話来ました？」

「来ないの」

「そうっすか。今日もライブなんですよね。忙しいんじゃないですか？」

「そうなのかな・・・」

「ツアーとかした事ないんで判らないけど、移動とかで相当疲れるみたいだし」

「そう言えば、そんな事言ってた」

昨日偶然に出会っただけの関係。

タイプでもない。

カッコ良くもない。

今も。これからも永久に間違っても好きになるような男でもない。

誰かに友達と紹介するのも気が引ける。

何となく自分から今夜電話すると約束してたのを思い出してかけただけ。

「また今度かけるね」

「え？もう切っちゃうんですか？」

「うん。」

「はあ・・・マジっすか」

かける相手も、瞬君じゃなくて良かった。

ただこの時間にかけられる相手が瞬君以外居なかっただけ。

誰でも良いから聞いて欲しかっただけ。

かけると約束をしたのは私。

それを一応守って、2度と繋がろうとも思ってた。

「じゃあですね」

「何？」

そのまま自分から切る事もできた。

でも切らなかったのは淋しかったからでもなく、誰かと繋がっていたいからでもない。

何か妙に引き付けられる独特な変な間に切るタイミングを失っただけ。

「じゃあ、取り合えずですねえ」

「何？」

「私と一緒にしりとりでもしませんか？」

突然言い渡された瞬君の突拍子のない提案に、切る理由が思い浮かばなくなっただけ。

「YUIさんの事は取り合えず置いてですねえ」

「ちょっと待って！何でしりとりなの！？」

「何でってアナタって人は・・・」

「何！？そんな何か意味あるの！？」

「優奈ちゃん。しりとりを馬鹿にしてるでしょ。こんな奥深い大人の遊びを」

子供の遊びだと思ってたしりとりが

どうして大人の遊びだと言うのか理由が知りたくなっただけ。

「まあ、細かい事を説明するよりもやってる内に判りますよ。取り合えずやりません？」

「どうすれば良いの？」

「普通に言っていけば良いんですよ。じゃあ、僕から言いましょうか」

「アから始めるの？」

「何でも良いですけど、じゃあ。アからにしましょうか」

「じゃあ、ア！」

「では、アナル」

「大人のって、そういう事だったの！？」

「そういう事って別に何でも良いですよ。次はル！優奈ちゃんですよ？」

「ルビー。ヒでも良いよ？」

「いやビで大丈夫っす。ビデ」

「最低！」

「次はデですよ。テでも良いですけど」

「じゃあ、テレビ。あっ！またビになっちゃった」

何年ぶりにしたからだろうか。

夢中になって答えあってるうちに気が付けば夜明け前。

「僕は眠くないけど、優奈ちゃんの方は大丈夫スカ？」

「私は大丈夫だから！メでしょ？メダカはさっき言ったし・・・」

切るのが淋しくなって何だかんだ自分から続けたしりとり。

「夜中なら起きてるんで。続きはミからで」

「うん！じゃあ12時にかけるからね！」

今日だけじゃなくて明日も明後日も繋がっていたくて。

しりとりを武器に私から取り付けた約束。

予想以上に心癒されて眠りにつけたはずなのに。

「もうー！いい加減起きなさい！」

お母さんの怒鳴り声で目覚めたせい、くり返してくる憂鬱。

階段を下りる事すら体が重い。

居間には世界で1番と2番に嫌いなお母さんと裕貴。

でも、存在さえ気にもならないぐらい頭の中はYUIちゃんの事だらけ。

右から裕貴。

左からお母さん。

2人の会話が私の頭の中をスルーして行く。

「起こさなかったら、いつまで寝てんのよ！少しは家の事手伝わとかしなさい！」

夜中に電話してたくせに！ちゃんと判ってるんだからね！！」

「もしかして姉ちゃん今流行のアレだったりして」

「ちよつと裕貴。アレって何よ」

「アレだよ。新型インフルとか言うさあ」

「やだ！ちよつと優奈！さっさと部屋に戻って！何かあったら携帯から電話して来なさい！」

勝手な想像でインフルエンザ扱いも気にならない。

起きろ降りろと言われて居間に行ったけど、すぐさま寝なさいと言われて戻ったベッドの中。

無駄な時間に労力に立ちくらんだけど。

頭がボーとするのは寝不足だからなんかじゃない。

原因は未だに來ないYUIちゃんからの連絡のせい。

【もしも】

電話が來たら、何て言えば良いのだろう・・・。

怒る。泣く。気にしてないフリをする。

同じ事を何度も繰り返し思っては泣いて。

またYUIちゃんからの連絡がないまま日付けが変わったと同時に涙が溢れてきた。

（どうして？何とも思っていない訳？）

コメカミが痛い。

指先が冷たくなって痺れて行く。

口の周りがガクガクと震えだし、手で押さえると振動が体全体に伝染してくる。

（何で連絡くれないの？どうして？）

胸が痛い。

体中が震え出して呼吸が乱れて来る。

自分の体なのに怖い。

押さえようにも止まらない。

（もうヤダ！誰か助けて！）

そう心の中で強く願った瞬間、YUIちゃんじゃない携帯の着信音

が鳴った。

待ちぼうけ(3)

「もしもし？瞬ですが。」

電話の主は瞬君。

時間的に何となく予想はついてた。

知り合ったばかりの相手に少しは気を使わないといけないのかもしれないけど。

全く気がない異性だからか余計にそんな気すら起こらない。

「今マズかったですか？」

「何が？」

「いや……。何となく機嫌が悪いような」

言葉を交わす度に、どんどん堕ちて行く私の気持ち。

どうでも良い瞬君は電話をしてきたのに、YUIちゃんは未だにメールすらくれない。

【終わりなら】

一言だけでも言ってくれば良いのに。

言にくいのならメールでも良いのに。

何が何だか判らない状態で待ってる時間が辛い。

どーでもイイ男の声に返事をするのさえ面倒。

いつその事今すぐ切ってしまいたい。

「何か用でもあった？」

「いや……。12時過ぎたのにかかって来ないんでかけてみたんですが……」

そんな空気を読めてない瞬君に終止符を打つため自分から締めに入ってはみたけど。

「今何時？」

「U字工事です」

予想外なツマラナイ返しに苛立ちまで追加された私の心。

「バカじゃないの。今何時って聞いたの！」

「疣^{いぼ}痔です」

「まじイラ付く！バカでしょ！」

そのまま言い捨てて切ってしまうば終ったはずだけど。

「バカって僕から言わせたら、アナタがバカなんすが」

「はぁ！？何で！？」

「12時にかけるからって言ったのはアナタっすよ？自分でした約束破っておいて」

「頃って言ったでしょ？今かけようとしてました！」

「本当ですか？」

「本当です！今かけようとしてたんです！だからすぐ出たでしょ！？」

売り言葉に買い言葉。

私の口は止まらず小学生レベルな口喧嘩に発展。

結局電話を切る理由を自分から失くした。

「じゃあ、昨日の続き。ミですよ」

「判ってます！南！次もミ！ほら早く言いなさいよ！」

けんか腰で始まった第2回しりとり大会。

きつと始めてしまえば、昨日みたいにYUIちゃんの事を考えなくなると思っただけ。

いきなり3問目で言葉が思い浮かばない。

考えれば考えるほど、頭の中はYUIちゃんの事で混乱する。

「ル……。ルだよね」

何度も呟きながら考えてたのは、ルから始る言葉じゃなくて電話を切る言い訳。

「優奈ちゃんルですよ？」

何も思い浮かばず、いつしか声さえ出なくなって来た。

「どっか悪いすか？」

「うん。ちょっと」

「そうですか。じゃあ、また今度にします？」

無言の時間に堪えかねたのか最初に言い出したのは瞬君。

普通に考えたら、具合が悪いと聞けば電話を切るはずなのに。

「考えるって結構頭使うんで。じゃあ私の話をしますね」

「はあ!？」

瞬君の発案は、またしても予想外。

「あの後すぐ寝たんですね？」

「そう……。だけど」

「で、夕方前まで寝てたんでしょ？また寝ると頭痛くなって逆効果ですよ？」

「だからって、何で」

「まあ良いじゃないスカ。どうせ通話料がかかるのはコッチの方だし」

次回になったのは、しりとり続きだけ。

「今俺。めっちゃくちゃ悩んでるんすよ」

「ちょっと！体調悪いって言ってるんだよ！？」

「まあまあ。そんな事言わず。」

勝手に始った瞬君の話。

独特な間のある話し方にズルズルと引きづられ、何となく聞くハメになったけど。

でも結局は、それで良かった。

別に瞬君に興味がある訳じゃないけど。

バンドというモノ自体がどういうモノかよく判らないけれど。

「イベントの時に知り合ったベースの方が。一緒にやらないかって」

「じゃあ、その人と組むの？」

「いや？」

「いやって何。」

「何となく私が勝手に想像してみただけで」

「はあ！？何それ！」

「これは。私の勝手な妄想でございます」

聞いているコッチが痛くなる瞬君の妄想話にブルーな気持ちは吹き飛んで。

いつしか笑いが止まらなくなった。

でも、全くYUIちゃんの事を考えてない訳じゃない。

頭の隅でずっとキャッチが入るのを待ってた。

次の日も。

その次の日も。

YUIちゃんから連絡はなく電話をくれたのは瞬君。

「私の予定では、来年の秋にメジャーデビューを果たすんです。でー！そうなるからじゃあ、色々と忙しくなるじゃないスカ！」

「だからってさあ。サインの練習してるってバツカじゃないの!？」

「じゃあ、優奈ちゃんが俺にサインをしてもらおうとして」

「全然欲しくないです!」

「サラサラと書かれた方がカッコ良いっしょ？」

「ねえ!ちゃんと聞いてた? 瞬君のサインなんか欲しくないって言ったの!」

「またまた」

「またまたじゃないって! マジ要らないんだけど」

瞬君の話しに毎晩息切れするほど沢山笑った。

でも目覚める度にぶり返す憂鬱。

日に日に食欲も無くなって、意識が朦朧もうろうとしてくる。

何の進展も無いまま迎えた夏休み最終日。

(こんな気分で学校なんて行けないよ!)

そんな思いから決心が着いた午後3時。

運転中かもしれないけど。

留守電だったら一言だけ。

もし繋がったら、連絡がなくて不安だって。

会いたかったって泣いてやる！

言う言葉は決った。

今なら言える。

絶対に言える！と勢いでかけたYUIちゃんの携帯番号。

〓お客様がおかけになった電話番号は現在使われておりません。番号をお確かめの上・・・〓

聞こえて来た予想外なアナウンスに愕然となった。

ぶっ飛ばせ！（1）

あの日から2学期も始って、もう9月中旬。

【もしも】

あの時。1日でも早くYUIちゃんに電話していたら繋がったのだろうか。

〓お客様のおかげになった電話番号は現在使われておりません。番号をお確かめの上・・・〓

何度も聞いた同じアナウンス。

メールが送信されないまま戻って来る度、胸の中に黒い鉛のようなモノが増殖して行く。

何度も忘れようとした。

きつとYUIちゃんは、このまま自然消滅したいんだって。

何も無かった事にしたいんだって。

私の事なんて何とも思ってたって。

そう現実を受け止める度、YUIちゃんが移動している場所を示す為に部屋のドアに貼った日本地図の前に立つけれど。

Yの文字を書いた画鋏すら外す事が出来ない。

破り捨てたい衝動にも駆られるけど、YUIちゃんの声が。

私しか知らない優しい笑顔が頭の中を駆け巡って何も出来ないままベッドに潜り込んで何度も泣いた。

日に日に募っていく胸の重み。

このままでは自分が壊れてしまうと限界を感じた金曜日。

（全部吐き出してやる！）

瞬君の携帯に電話をかけた。

「学校始るし、今度は私からかけるまで待っててね！」

その言葉を待ってなのか。

瞬君から電話は来ない。

本当は、YUIちゃんから連絡が来た報告で瞬君に電話をかけたかった。

でも、いくら待ってもYUIちゃんからの連絡は来ない。

きつと瞬君も、もう判ってるはず。

何となくその場のノリでそうっただけ。

バンドと言う世界ではよくある事。

私は、ただの遊ばれて捨てられた女。

瞬君もYUIちゃんの事を名前と顔ぐらいを雑誌で見た程度にしか知らないけど。

遠距離恋愛してる相手がバンドマンとしか知らないクラスメイトより。

YUIちゃんという存在すら知らない愛子より。

私がどれだけ好きだったか知ってる誰かに早く忘れろと背中を押して欲しい。

夏美がいない今。そんな相手は瞬君しかない。

瞬君になら何でも言える。

泣いて喚いて胸のうちを全部吐き出してやる！と。

恥もプライドも捨て発信したというのに……。

いつまで経っても瞬君の声は聞こえず、虚しく呼び出し音だけが鳴り響く。

留守電に一言残す為に待ってたけど、設定されていないのか一向に変わらず。

いい加減諦めて発信を切った。

「どうして私は、こんなに不幸なの!？」

発散するツモリが余計に増えた自己嫌悪。

(人がせっかく決心してかけてるのに!!!!)

恋人論外・友達以下の分際に、勝手な怒りを憶えた2回目の発信。

(出るまで鳴らしてやる!!)

そうとは思ったものの呼び出し音を聞いていると余計にムカついて
切斷。

諦めがつかずに発信した3回目も4回目にも出ず。

何度目かさえ憶えてないぐらいかけまくり。

瞬君本人が出た時には、自分が何の為に電話をかけてたのかさえ忘れてた。

「どうしたんすか？」

やっと繋がった喜びと安堵は一切無く。

増幅しまくった不満が先走っての怒り口調。

「どうしたんすかじゃないよ!寝てたの!？」

「いや……。起きてましたが・・・」

「じゃあ、何で出ないの!?!」

「ん?・・・それは・・・はあ・・・」

「はあって今の何!? そう! 判った。私なんかと話したくない訳!」

「・・・いや・・・。そういう訳じゃなくて・・・」

「じゃあ何! はっきり言いなさいよ!」

後悔先に立たず・・・。

いつになく口ごもった瞬君を攻め立てて得た電話に出なかった理由。

「オナニーしてたんで」

「はあ!?!?・・・」

「だから・・・オナニーしてたんです。」

「2回も言わなくても判った!」

「何度も鳴らすから・・・集中できなくて」

「もう良い!」

「で・・・。携帯バイブにしてたんで、丁度良いかかってチョット・・・刺激してみたんですが」

「もう良いってば!」

「で……。今丁寧に後処理をしている最中なんで……。もう少しお待ち頂けないかと」

「もうそれ以上言わなくても良いの！本当に最低！終わったらかけ直してよ！？」

「……。このまま……。待って頂けません？……」

「ヤダよ！」

「何で……。すか？」

「だって！何かさっきより変な息使いしてない！？」

「そりゃあ……。フフフフ」

「フフフって何！？もうヤダ！！待ってるからね！？」

切っても上がっていく心拍数。

リアルタイムな自慰行為報告に何を言いたくて。

何を聞いて欲しいのかさえ全部ぶっ飛んでしまった私を更に追い込むお母さんと洗い立ての洗濯物。

「大きな声出して。元気そうじゃない」

「何で勝手に入ってくるのよ！」

「良いじゃない。家族なんだから」

私の部屋がベランダに面してるから、しょうがないけれど。

変態野郎から今すぐに携帯が鳴るかも知れない。

「ちょっと！明日にしてよ！」

「アンタが失恋して元気が無いから今まで気を使ってたら溜っちゃったの！今干さないと匂うのよ！」

早くこの部屋から出て行ってもらう為に思いついた案も虚しく鳴り響く瞬君からの着信音。

「私がやるから！早く出て行ってって言ってるでしょ！」

「そんな良いわよ。早く電話出てあげなさいよ。それともお母さんに聞かれたら困る事でも話してた訳？」

「全然違います！じゃあ、聞いてれば良いでしょ！」

「じゃあー、そうさせて頂こうかしら♪」

自分で掘てしまった墓穴。

鼻歌交じりで干し始めたお母さんが目の前に居るなんて知る訳もないが。

「お待たせしやした！」

「ムカツク！」

「何ですか？待たせたからっすか？」

「違う！もう良い！」

いつもと違う快調な瞬君の声がムカツク。

何もかも上手く行かない自分にムカツク。

お母さんを前にYUIちゃんの事なんて話せない。

だから今日は切ろうと思った。

でも、予想外なほどハイテンションで強引な口調に瞬君のペースに巻き込まれて切れなくなった。

「何か乗りが悪いっすねー！夜はこれからっすよー？」

「だから何！！」

「だーかーらー！今から私と一緒にドライブに行きませんか？」

「へ？ドライブって今から・・・？」

「そう今からすよ。どこまで迎えに行けば良いスカ？」

「どこまでって無理だよ。もう10時過ぎてるし、うちの門限って6時だから」

瞬君からの誘いは私の中では、許される事のないと思っていた。

何も言っていないのに許してくれたのは、お母さんの方。

「ドライブなんて良いじゃない。いつてらっしゃいよ」

「え？今からだよ？」

「別に友達とドライブするだけでしょ？良いんじゃない？」

相手も男だと気付いているはずなのに。

同級生の男子から電話が来ただけでも激怒してたお母さんの言葉とは思えない。

「男だよ？」

「判ってるわよ？だから何？」

「本当に良いんだね？」

「本当について、良いって言うてるでしょ？ほら！待ってるんじゃないの？」

逆に私の方が疑ってしまうほどの呆気なさ。

行く気があると言うよりは行かざる得なくなってたドライブ。

「カーナビあるの？でも、駅で良いよ」

「ダメヨ。こんな時間に、駅で待ち合わせなんて危ないじゃない！
どうも、こんばんわ〜！聞こえますか〜？優奈の母ですよ〜？家ま
で迎に来てくださいね〜！」

「ちょっとヤメテよ！」

「5丁目ですよ〜！」

「って、アンタも一々返事してんじゃないわよ！」

「何何？フラレタばかりの姉ちゃんに新恋人？世の中には悪趣味な
男がいるもんだね〜。」

「何で裕貴まで勝手に入ってくるのよ！」

「何にも取り得も無い姉ですけど、宜しくお願いしま〜す！」

弟まで加わって勝手に決められ上。

お父さんも合わせて3人の余計なお見送り。

「姉ちゃん！今度は逃げられんなよ！」

「だから！違うって言うてるでしょ！？ただの友達なんだってば！」

「そんなのこの際どうでも良いじゃないの！」

「ほら。お父さんからのおまじないだ。優奈。しっかりやってくる
んだぞ！」

肩の上で石まで叩かれて。

時代劇で見た何かの出陣のような何かを経て。

家から徒歩2分。

待ち合わせた場所に車はもう到着していた。

ぶっ飛ばせ！（2）

携帯で何度も話しているけれど、実際に会うのは今日で2回目。

どんな顔して。何て挨拶すれば良いのだろうか。

【あの時は・・・】

YUIちゃんの事で頭が一杯だったから眼中になかったただけかもしれない。

こんな時間に男と女が2人きりでドライブ。

出会いも、よくよく考えたら運命的。

【もしかして・・・】

口説かれたりするのかな？と思ったら、急に瞬君の顔が美化されて。

（本当の私の運命の人は、YUIちゃんじゃなくて。赤い糸の相手は、きつと瞬君！）とまで広がった感情は。

「お久しぶりっす！優奈ちゃん！」

ドアを開けて出て来た現実には、一瞬にして木っ端微塵に吹き飛んだ。

「ちょっと！何なの！？その格好！」

「格好？・・・」

襟袖が切りっぱなしの薄いピンクTシャツまでは許す。

でも、どこで売ってるのかも判らない

豹柄・白黒ストライプに赤紫水玉のパッチワーク編成テロテロパンツだけは許せない。

「ありえない！？何そのパンツ！」

「優奈ちゃんとの初デートなんで張り切って、お洒落してみたんすが！」

「デートじゃないし！それに、全然お洒落じゃないよ！」

わざわざ来てくれたなんて関係ない。

そんなパンツを履いた男なんて冗談でも歩けない。

勘違いも甚だしい瞬君のファッションセンスに、いっそのまま帰ろうと思ったけど。

「さあ！今夜はぶっ飛ばしますぜ！」

「ちょっと！？近所迷惑でしょ！！！」

「じゃあ早く乗って下さいよ。」

私の戸惑いを見捨ててフルボリュームで鳴らし始めた音楽に、乗らずには居られない状況に嵌って。

「行くぜ〜!」

「って、どこによ!」

会話も出来ないぐらいの大音量の車内。

行き先不明・目的不明で不安だらけのドライブが始った。

聞いた事もないテンポの速い曲に合わせて大声で歌う瞬君。

「ねえってば!スピード出しすぎだよ!」

私の声を掻き消す大音量。

瞬君も1人世界に入り込んで全く聞こえてない。

「ちょっと〜!!怖いってば!」

肩を叩いても、一瞬顔を見るだけで完全無視。

何もない真っ暗な田舎道を走るに連れ、増して行く不安に恐怖心ま
で芽生え。

「何するんすか!」

「何じゃないよ!さっきから、ねえって呼んでるのに!」

ボリュームを一気に下げて瞬君に怒りをぶつけたけど。

「どこって。言っても判らないっすよ」

「判らないって何！」

「まあ、そんな事より取り合えず一緒に歌いましょう！」

「知らないよ！こんな曲！」

「マジで言ってるんすか！？こんな有名な曲をつ！？デジマ？」

「何！デジマって！」

「マジで？って事っす」

「何それ！誰もそんな事言わないよ！だから、どこに行くのって聞
いてるの！」

「まあ、そんな事は置いといてですね。取り合えず一緒に盛り上が
りましょう！」

「盛り上がれないってば！」

「そうと決れば、次の曲は……」

「決っていないから！」

「この歌を……お前達に捧げるぜ！！」

「お前達って誰！だから！ボリューム上げないでよ！」

結局行き先も聞けないまま。

フルボリウムに戻った車内は何もかもが瞬君ペース。

「何で頭振ってんの！？ちょっと前見てよ！」

前奏に合わせてヘッドバックキングしながらの運転に命縮まり。

「セイ！じゃないよ！」

猛スピードでの急カーブに肝が冷え。

何度もうねりくねったヘアピンカーブの重力に絶え過ぎて声を失くし。

「テケ・テケ・テッ・テテ！サンキュー！さあ、優奈ちゃん。着きましたか……大丈夫スカ？」

極めつけのドリフトで車が停止した頃には酸欠で放心状態に陥った。

そんな私を1人残し、上機嫌で口演奏で公衆トイレらしき建物に出て行った瞬君。

どこに着いたのか。

ここは何所なのか全く判らない。

朦朧とする意識の中、森か林か山の中にある何かの施設の駐車場なのは何となく判る。

電灯も意味がない程度の真っ暗闇。

異様に眩しく見える公衆トイレと2台の自動販売機。

目に映る物が何なのか認識できるぐらい少しづつ私の意識も落ち着いてきた頃。

鼻歌交じりで車に戻ってきた瞬君が、運転席から突然無言で覆いかぶさって来た。

声に出す間もなく倒されたシート。

（何！？ちょっとヤメテ！）

まだ頭が朦朧としてるからか、何故か声が出ない。

手で抵抗をしようにも、体に力が入らない。

（瞬君なんかと、絶対にイヤ！）

必死に頭と体は瞬君の事を完全拒否してるハズなのに。

微々たる月明かりを逆光に。

シルエットでしか判らない瞬君の上半身に胸が苦しいほど高鳴って行く。

今まで気付かなかったキレイな瞬君の輪郭。

このまま見つめていたいほど美しい。

私からの返答を待ってるようだけど、何か言ったら。

少しでも動いたら視界に写る全てが壊れそうで、拒否する事を止めて見惚れていた。

ずっと見つめていたい。

ただ、それだけだったはずの感情を煽る瞬君の声。

「優奈ちゃん……」

動けない私を見下ろして、ゆっくり話しかけてきた瞬君の声が体の中に浸透して行く。

感じた事がない心地良い不思議な気分。

この状況。

この現況に、この雰囲気。

私の意識は目を閉じて瞬君を受け入れる方向へ急速に向い始めた。

ぶっ飛ばせ！（3）

何だかんだ緊張してるからなのか。

それとも今更になって怖気付いてるのか。

自分からシートを倒してきた癖に未だ何もして来ない瞬君。

受身で待ってるのも、そろそろ限界。

私の体に溜った欲求不満が月夜のシルエット王子を求めて暴れてる。

（ご無沙汰もご無沙汰！アンタ蜘蛛の巣はってるよ！）

（待ってなくたって良いんだよ！自分から行っちゃえ！）

理性VS欲求不満の対決は、欲求不満の完全勝利。

（GO！GO！優奈！行け！行け！優奈！）

欲求不満の応援を得て、肉食系女子に心は決った瞬間。

「優奈ちゃん・・・？もしかして俺とSEXする気で来たんすか？」

疑問符つきな瞬君の言葉に、野獣化しかけた心に理性が急ブレーキをかけた。

「何となく・・・。」

「・・・何となく？」

「求められてるような気がして・・・」

瞬君の目的は、本当にただの音楽鑑賞であり。

その際にシートを倒した方が楽しめるという事であり。

全く持って、私とSEXする気で連れて来た訳ではない事が判明。

受け入れOK！体も準備万全状態。

SEXしたいと思ってたのは私なのに。

「な訳ないでしょ！！あんな運転するから気分が悪かったの！」

「ですよね・・・」

「早く！その音楽鑑賞ってのしなさいよ！」

「そうっすね・・・。じゃあ、もう少しだけ待ってて下さい」

「何でよ」

「SEXしたいのかな」とばかり思ってたんで私、只今頭がそっち方向の事で一杯なんです」

「そんなの知らないよ！！」

「じゃあ……。最初は違うのを予定していたんですが……。何か気分的に……。」

「何でも良いから早くして!」

「では、取り合えず鬱モードに」

ギリギリのラインで、赤っ恥をかかずに済んだ自分を差し置いて。

何もかも全部瞬君に押し付けて始った音楽鑑賞。

倒れたままの助手席に私は体育座り。

罰が悪いのか瞬君は目を閉じて運転席に埋もれた。

聞いた事もない興味もない曲が流れる中、

私の頭の中はさっきの勘違いに対して突っ込まれた場合を想定して言い訳ばかり考えてたけれど。

さっきと声が似てるようだけど曲調が違うから別のグループなのか。

それとも流れてた曲全て違う人達だったのか。

あるスローテンポな曲をきっかけに、少しずつ歌詞にまで意識が向いてきた。

色々なボーカルが歌う決して幸せではないであろう曲達。

英語なのか何語なのか横文字の訳が判らなくて。

何を言いたくて伝えたいのか全ては理解できないけど。

日本語の部分だけで何となく情景が見えてくる。

不安。

淋しさ。

刹那・・・。

ピクリとも動かず、音楽に浸ってる瞬君がいつ豹変するか不安を抱きながら、

体育座りを止めてシートに横たわると、感情まで伝わってくる。

戸惑い。

失望。

迷い。

何曲もの思いを真っ直ぐに受け入れられるようになった時。

きっと、そんなシュチュエーションで書いたのではないだろうけれど。

私の心の中にあるYUIちゃんに対する今の感情にピッタリ嵌った曲に、隣の不審者の存在も忘れ。

いつのまにか目を閉じて曲の世界に引きずり込まれてた。

突然の出会いで一目惚れをして。

ほんの数時間とは思えないほど急進展した所も似てる。

歌詞とは違ってるけど、電話で沢山の話をして。

別れを経験して、またくっ付いて2人の絆が深まったと思っていたのも同じ。

まるで自分の気持ちが歌詞になったようなスピード感溢れる曲に、
どんどん思いが重なっていく。

これからも続いて行くのが当然だとは思ってなかった恋が

また会える約束と共に、消滅して行こうとしている。

終わりなら留守電に一言だけでも。

メールでも良いから教えてくれさえすれば、次に踏み出せるのに。

そうしてくれないと、踏み出せないのに。

そんな思いを深くさせたまま、その曲は悲しげなギターの音色と共にフェイドアウトして行き。

「どうしたんすか？」

変わりに車内に大きく響いた鼻水をすする音に気が付いた瞬君が次

の曲のボリュームを下げた。

何でもないと言ってやりたいのに、声は嗚咽になってしまう。

涙を拭って泣いちゃった！と今すぐ笑い飛ばしたいのに、どんどん涙が溢れて頭が混乱するばかりで。

「優奈ちゃん!？」

何も言わずにドアを開けて、公衆トイレに駆け込む事しか出来なかった。

ぶっ飛ばせ！（４）

涙は止まった。

用も済ませた。

鼻は安物のトイレットペーパーのせいで、まだ赤いけど。

キレイに手入れが行き届いてはいるが、所詮トイレはトイレ。

これ以上こんな所に居て、瞬君に大きな方をしてたかと思われても困るけれど……。

だからと言って、車に戻るにも何て言えば良いのか思いつかない。

あの時カバンを持って出ていれさえすれば。

コーヒーでも買って「飲む？」とでも言えたのに。

YUIちゃんの事といい、今の状況と言いだした事でもない事まで全てにおいて上手く行かない。

どんどん募っていく自己嫌悪。

幽体離脱しそうな勢いで大きく出た溜め息につられて、やっと足がトイレから動き出したというのに。

「優奈ちゃん！」

車の前で振り返った予想外な瞬君の姿に、思わず反射的に足が引き返そうとした。

「優奈ちゃん！優奈ちゃんっ！」

「何回も言わなくなたって聞こえてるつつうの！！そんな事より何なのその格好は！」

引きづるぐらい長い黒のロングスカートに、裸に黒ジャケット。

「私のステージ衣装です！」

「だから何でそんな格好してるって聞いているの！」

「優奈ちゃんがウンコしてる間に、メイクも髪もバッチリスタンバイ出来ました！どうですか？」

「はあ！？ウンコなんてしてないし！」

「まあ、そんな事どうでも良いじゃないですか！それよりもっすね」
引きこもってた理由の誤解が解けてないのは気がかりだけど。

興奮気味な瞬君の勢いに引き込まれてと言うよりも。

「似合いませんか？」

「本当に瞬君・・・なの？」

見れば見るほど美しい目の前のビジュアル系に。

いつの間にか思考は全て奪われて。

つい数分前までどん底に落ちてたはずの気持ちは、驚きと衝撃で全部頭の中から吹き飛んだ。

「すごいキレイ！別人みたい！」

「そうっすか？何か嬉しいな・・・。」

「本当に超キレイ！瞬君さあ！永久に化粧しようよ！その方が絶対に良いって！」

「やっぱり嬉しくないような・・・。」

「バカ！誉めてるんだよ！孫にも衣装ってこういう事なのかな・・・？親ばかってこう言う気分なのかな」

「本気で嬉しくないんですが・・・。」

「で、どうしたの！？何でそんな格好してるの！？？」

「それはですね」

「判った！受け狙い？」

「違います」

「判った！私が泣いてたから驚かそうとして」

「違います！」

「じゃあ、何よ！」

「それはですね・・・」

「あ！判った！」

「絶対に判ってないので、ちょっと静かにして下さい」

少し照れた笑顔が素敵。

困った顔もカッコ良い。

あまりの変貌ぶりに、上がりまくるテンション。

今から一体何が起こるのか。

期待と興奮で制御不能だったはずの私の心は。

「お待たせしやした！」

後部座席から出現したソレを見たと同時にブッ冷めてしまった。

「マイクテス・ワン・ツー」

取り出されたのは1台の小さな赤いステレオ。

そして、ラジカセの大きさに不釣り合いなほど長いコード付のマイク。

「何それ」

「マイクのテストッす」

「だから何でマイクなんて出てくるのよ! って言うか何で持ってるの! ?」

「良い感じっす!」

「ねえ! 聞いてる! ?」

ついさっきまでの興奮が、怒りに変わったのを瞬君は知ってか知らずか。

ステレオから響く何故か聞き覚えのある悲しげで控えめなギター音。

「この曲は・・・」

「何マイクで喋ってんのよ! キモいんですけど!」

「まだ誰にも聞かせた事がなかったんです」

「だから! 何でマイク使ってるの!」

「まだ気が付きませんか?」

「え・・・?」

「さっき、アナタが車から出て行った時の曲」

「アレが何よ・・・」

「では、優奈ちゃんに捧げます。」

「何差し伸べてんのよ！マジでキモイんですけど！！」

混乱する私の精神を置き去りに。

ベースとドラムの音も重なった途端1人自分の世界に入ってしまった瞬間。

「お聞き下さい・・・」の後に何か横文字を言ってたけど、聞き取れなかった。

ぶっ飛ばせ！（5）

一体何の為にわざわざメイクまでして着替えたのか。

何で瞬君が歌いだしたのか判らないけれど。

ただ。

判った事は、私の涙が止まらなくなったアノ曲が。

堪えきれずに車から飛び出した原因の曲が。

トイレに引きこもってウンコだと思われてしまったほど長い憂鬱に陥れた詩が。

今。目の前で歌ってる瞬君の曲だった事。

そして、また涙が溢れてるって事。

「これって、瞬君の詩だったの？」

「そうっす。」

「すっごく良かった」

「本当スカ！？」

「本当に本当だよ！？ねえ！もう1回歌って！」

「マジッスカ！？そんなに良かったですか！？」

「うんうん！本当に！お願い！歌って！」

「もちろん歌いますよ！では聞いてください！」

何度聞いても。

聞けば聞くだけ。

もっと。もっと聞きたくなる瞬君の声。

「次は違う曲聞いてください」

「えー！？同じのだけでイイよ！」

「そんな事言わず！聞いてください」

そう言って歌いだした違う曲も。

そのまま続いた少しスピード感ある曲も。

悲しげな曲に、どんどん心奪われていく。

「次は！？」

「今の所この4曲だけっす！」

「えー！？もっと聞きたい！」

「そんな事言われても……。じゃあ、今途中まで作ってる曲のサビだけ」

「それで良いから！早く聞かせて！」

「じゃあ・・・音はないんで」

無理やりマイクなしで歌わせた曲の続き。

その先が今すぐにでも知りたくて。

「タッタラ〜ララって、どうすかね」

「詩は出来てないの？」

「ある程度決ってるんすが。」

「そうなんだ。」

「どっちかと言うと音と同時進行で作るんすよね。こんな感じで踊るチックなのは決ってるんすが」

「踊る？」

「そう。こんな感じで肩揺らしてスイング的な」

「こんな感じで？」

「そう。こんな感じで」

2人で揺れながら一緒に悩んで。

真剣に考えて。

「え！？今のって決ってたの！？」

「いいえ！今何となく思いついて！ドンピシャじゃないっすか！？」

「私鳥肌立ってるよ！ほら！」

「俺もチンコにビリビリ来てます！」

サビだけだった曲からフルに偶然出来上がった新曲。

「忘れないうちに録音しないと！」

「え？そんな事できるの！？」

「これラジカセって言って。このカセットテープってやつで出来るんすよ」

瞬君のお父さんが愛用していた古いラジカセのボタンが押され。

夜明け前に納められた新曲は。

他の曲とは違って、詞に激しさも悲しさも感じない。

何かを訴えようとする訳でもない。

暗めだけど、ただ風の様なメロディーの心地良い曲。

どちらかが言い出した訳でもなく。

夜明けを感じ乗り込み、家路へと走り出した車の中で。

小さなラジカセから流れる完成したばかりの曲を聞きながら出来上がった喜びの余韻に浸った。

明るさがあるのが春風ならば。

新曲を例えるならば秋の夜風。

「何か不思議な曲だよね」

「どんな風につスカ？」

「ほら。恋だの愛だの失恋とかの歌でもないし。」

「そうっすね」

「夢とか目標に向ってる訳じゃないけど。よく判らないけど、1人で何かに向って突き進んでるって言うかさ！」

「まあ……。そう言う感じっすね」

「何て言えば良いのかな。ほら！運動会で1位になった時とか、サッカーでゴールが決ったみたいな爽快感って言うの？」

「感じますか！？」

「何か自分1人だけで浸るって言うか！スゴイ清らしいモノを感じるよ？私瞬君の曲の中で1番好きかも！」

「そうっすか！？じゃあ、特別に教えますとですね。実は、この曲はですね。」

どどん瞬君の世界に魅了されて。

冗談抜いて音楽として、この曲を好きになった事だけは認める。

でも、世の中には知らない方が良い事なんて沢山ある。

「オナニーしてる時に出来たんです！」

「はあ!？」

「窓全開で電気消して。夜風に吹かれて月見てたらサビが浮かんでですね」

この世に生まれて1番心地良く感じた曲が出来た理由が何であろうとも。

知らなければ、もっと好きと言えたかもしれない。

今夜その曲の誕生に立ち会った事が、感動以上の何かを生み。

私の心の中に深く刻まれた事だけは間違いなく。

YUIちゃんの事を諦める事も、上手く自分の中で消化して。

前に向って進む勇氣と氣力さえ湧いてた。

夜待ち合わせた場所に到着して

「大丈夫スカ？」

朝早く帰えるって来るなら昼前と言う条件を思い出した瞬君が

お母さんに怒られないかと心配してくれたけど。

「慣れてるから大丈夫だよ」

このままの気持ちで。

このまま今すぐなら出来そうな気がして。

「何か頑張れそうな気がする」

「え？何がスカ？」

「何でもないよ！また電話するね！」

瞬君の車を見送る事無く急いで家に帰った。

誰にも気付かれる事なく部屋に戻るなり。

忘れる為になければイケナイ最初の事として。

まずは、YUIちゃんが移動する場所を示す為に貼ったYの文字を書いた画鋏と日本地図の前に立った。

「バイバイ」

あんなに今まで躊躇ってたはずなのに。

勇気を貰ったからか泣く事も泣く簡単に外し終えられた。

けど。

第2に忘れる為になければと決めていた携帯電話を手にした途端、
急激に力が失くなって来た。

「今度こそ。今度こそ本当にバイバイ！」

何度も何度も思い返して。

「今消去しないと、絶対に不幸になる！消せば絶対に幸せになれる
！」

そう自分を追い込んで。

やっとの思い出YUIちゃんのアドレスと名前を携帯から消去した
けど。

「バカ！YUIちゃんのバカ！」

瞬君から貰ったパワーで頑張れたのは、ここまで。

結局、携帯に残ったメール履歴に送られてきた画像は1つも消せな
いまま。

枕を抱きしめ泣きながら眠ってしまった朝。

「ちょっと落ち着けて！そろそろ解散するだろうから、取り合えず戻ろうぜ？」

「始発から、どんだけ過ぎてんだ。もう7時だぞ。」

「なあ。せめてレコード会社の人達が帰るまでは待てって。」

「るせえな。今日しか家に帰れねえんだぞ？」

「何さつきから焦ってんだよ！お前が帰ったら、俺様はどうやって帰れば良いんだ！」

「知るか。マジ轢くぞ」

「って！危ね！今お前本気で俺様を轢こうと思っただろ！って・・・」

「おいおい！マジかよ！ちょっと待てって！」

「戻って来いやー！このー！YUIの糞野郎ー！！！」

また傷付くだけの運命を背負った2人の恋が、再び始ろうとした。

熊と白鳥に踊った日（1）

無理やり起こされたのはAM8時5分。

「ちょっと！いつ帰ってきたのよ！」

洗濯物を干しに来たお母さんに、昼頃帰る約束を破って帰宅していたのがバレて。

「アンタの分なんて作ってないのに！」

「要らないから大丈夫だよ」

「何が大丈夫なのよ！」

「まだ2時間も寝てないんだけど」

「そんな事知らないわよ！カーテンも開けて！外から見たら、だらしない家だと思われるじゃないの！ほら！早く起きてさっさと食べなさい！」

朝から怒涛の如くガミガミ言われて。

携帯で時間を確認したから、よく憶えてる。

「母ちゃんさあ。テレビ見てから機嫌が悪くって」

食卓に座るなり裕貴に小声で教えられた通り。

「あゝ！もう！お茶ぐらい用意しておきなさいよ！本当に何にもしない子達なんだから！」

台所に立つ後姿に、いつになく苛立ってるのを感じた。

「ジンハ様が結婚するんだってさ。」

「本当に朝からヤル気失くしたわ。」

「でも、いつかは誰かと結婚するんじゃないの？」

「違うの！あの女が嫌なのよ。もっと違う人だったらお母さんだっ
てこんなに苦しまないわよ！」

自分が熱狂してる韓国俳優の結婚報道に勝手に怒り心頭なお母さん
と。

他人事だと発言全てが正当論に聞こえる弟の裕貴と。

煮詰まった味噌汁と時間が経った白いご飯。

おかずは冷蔵庫に放置されてたであろう残り物のご飯の友という貧
祖な朝食中。

家電の着信音「森の熊さん」が軽やかに鳴り響いた。

今まで気になった事はなかったけど。

失恋傷心中の身にはムカツクほど軽快で明るいテンポ。

「何かイライラする音だね。違う音に変えてやろうかしら」

ある意味、失恋中のお母さんにも耳障りな着信音が鳴り響く中。

誰1人出ようとせず黙々と食事を進ませた。

「ちょっと裕貴電話」

「何で俺なんだよ。姉ちゃん出て来いよ」

「優奈はイイの。大体家にかけて来る人なんてアンタに用がある人が多いじゃないの。」

「な事ないし！俺に用があるなら皆携帯にかけて来るし」

携帯電話なら、誰に用があるのか判るのに。

誰宛か判らない家電への着信。

「もう本当にあゝ言えばこう言う！切れちゃうじゃないの！！」

そう言いながらも味噌汁を一口すすって。

結局言いだしっぺのお母さんが立ち上がり受話器を取った。

「あらゝ。お久しぶり！お元気でいらっしゃるの？」

電話の相手は、お母さんにとってスターの結婚話も吹き飛ぶ相手なのか。

声色が変わっただけじゃなく顔色を紅潮させ。

「やっぱり母ちゃんに電話だったな。」

食事の最中だという事を忘れたのか。

両手で受話器を持ち正座までして話し込み始めた。

「でもさあ。何で母ちゃんって電話で喋る時ザーマスのなんだろうね」

裕貴も私と同じ意見だった事を知り。

「お友達に誘われて始めたばかりで」

知らぬ間にお母さんがジャズダンス教室に行き始めた事を知り。

「そう言えば知ってます!？」

ジンハ様の結婚相手の本当か否かな噂話まで知った所で。

聞こえてないだろうけど一応「ごちそうさま」の一言を残して部屋に戻った。

日が明るいせいか。

ご飯を食べたばかりだからか。

まだ2時間も寝てないけど体がダルイだけで眠いとは思えない。

取り合えずベッドにもたれ掛かって。

つい数時間前まで日本地図が貼られてたドアを見つめてみた。

あんなに大きな物体が無くなったのに別に感じない違和感。

無くなってしまったのに何もなかったように思える自分が悲しくて
気分が滅入って来た時。

瞬君の名前で携帯が着信した。

「おはようございやす」

「何」

「あっ・・・！寝てました？」

「起きてるよ」

「何か機嫌悪くないスカ？」

「悪くないけど、鬱モードです」

「そうすか・・・」

沈黙が続いたけど、このまま切らないのは、いつもの事。

「で、何」

「実はすね」

別に大した用でもないのに、実はから始るのもいつもの事。

ただ違ったのは、瞬君の妄想話でも面白ネタでもなく質問だった事。

「何それ」

「女性の方が判るでしょ？本音で言ってもらえませんか？」

「本音って言われてもな」

「じゃあ、優奈ちゃんだったらで良いです」

【もしも】

彼氏を大事な話があると言って呼び出しました。

それは、今日じゃなきゃイケナイ事です。

「いつもと様子が違ったんすよね」

「デパートで受付嬢をしている空想彼女？」

「空想じゃなくて現実です。リアリーです。リアリー。」

「だって美人なんでしょ？本当って言われても信用できないよ」

「次は、だってゝ瞬君なんかには彼女がいるなんて思えないしっですよね」

「その通り」

「本当なんです！何度も話したんでもうしません」

瞬君より3歳年上の美人受付嬢。

交際して2年半。

時々バラエティー番組に出ている清楚で小柄な昔と言わず40歳近くなった今でも

十分可愛いと思える元アイドル似。

その彼女から仕事後に会いたいと言われたらしい。

「いつもと本当に何か違うんです」

「妊娠したとか」

「それは違うと思うんですが」

「何で？」

「昔1回あったんで」

「え？妊娠！？」

「その時とも違うし」

「えっ？じゃあ、もしかして産んだの？」

「いや？中絶しやした」

「酷い！」

「いや？私は産んでくださいって言ったんすが。向こうが墮ろすつて」

「何で？」

「俺が若いって。無職だし。親に紹介できないし、家庭も作れないって」

「仕事すれば良かったじゃん！」

「うーん……。それも言ったんすけどね……。はあ……。なんでしょうね」

「何だろうね……」

結局何も解決しないまま。

モヤモヤした気分のまま。

何度も2人で溜め息を吐いただけで。

「優奈！電話よ！」

「じゃあ。また電話して？夜でも良いから」

「ちょっと！早く出なさいよ！保留にしないんだから！」

「もう煩いなく！今大変なの！ちょっと静かにしてよ！じゃあ、ゴメンネ」

突然部屋に家電の子機を持って入って来たお母さんにより瞬君との電話は終了。

「そんな大きな声出して！待ってる人に失礼でしょ！」

「じゃあ、保留にしてくれば良かったでしょ!？」

「そんなの知らないわよ！もう切ったんだったら早く出なさいよ！ムカツク娘なんだから！」

瞬君の気持ちも。

伝染して不安定になった私の気持ちも。

全てに無神経に踏み込んできた上に。

「繋いでやらなきゃ良かったわ！ほら！」

極め付けに上から目線な物言いまでされて。

勢い良く差し出された受話器に、お母さんへ対する全ての苛立ちと怒りを込めて。

「はい。って言うかアンタ誰。」

相手が誰だろうが、そんな事関係ない。

今まで出した事がない低い声で電話に出たけれど。

「ちょっと優奈！何その言い方は！」

お母さんの叱責に。

相手の返答を待たずに思わず押してた保留ボタン。

「ちょっと優奈！何で保留にしてんのよ！」

「電話なんてどううでも良いよ！さっきから、お母さんの方がムカツクんですけど！」

「人がせっかく繋いであげに来てやったのに！」

「その上からモノ喋るのがムカツクんだよ！」

白鳥の湖のメロディーが流れる中お母さんとのバトル。

「もうお昼ご飯抜きだからね！バカ娘が！」

捨てゼリフを残して出て行ったお母さん。

どれぐらい時間が経ったか判らないけど、結構長い時間鳴り響いてる保留音。

「もう本当に煩いなく！！！」

収まらない苛立ちに、このまま切ってしまうおうとも思ったけど。

「もしもし！」

もう待ってないと思いながら、一応出てみた電話。

「何だ切れてんジャン！」

一体誰からだったのか気にもならないほど私の頭の中は、お母さんに対する不満だらけ。

「卒業したら絶対に家を出てやる！」

その気持ちだが、さらに強くなり。

「で、部屋は畳じゃなくて床でもない板みたいなので。」

午前の日差しが差し込む中。

ベッドに入って近い未来予想図を頭に描きながら目を閉じた。

熊と白鳥に踊った日(2)

お母さんとなんて絶対に一緒に暮したくない。

高校を卒業して。

就職をしてドラマの主人公のような素敵な部屋に1人暮らし。

トイレも台所も可愛く統一して。

カーテンの色とインテリアの配置が決った所で、突如頭に現れたイケメン彼氏。

甘く。そして時には刺激的。

激しくなっていく妄想の中で、あるシチュエーションが浮かんだ。

いつもの週末は、この部屋に彼が来て一緒に朝を迎えるけれど

今日は久しぶりに待ち合わせてのデートの日。

1度目覚めたけれど、時計はまだ起きる予定の1時間以上前。

(まだ暗いし、こんな時間か。よっし2度寝! 2度寝!)

3度の飯より睡眠LOVE。

いや。妄想LOVE。

枕を彼に見立てて抱きしめながら。

激しく甘い設定で妄想に耽っていると。

家電に森の熊さんの着信音が鳴った。

「もしもし?」

もちろん電話の相手は優しいマイ・スイート・ダーリン。

「もしもし? 優奈?」

「うん・・・。」

「聞こえてる?」

「聞こえてるよぉ〜だ!」

「よぉ〜って。酔っ払ってんのか?」

「酔ってないよ? フフフフ」

「フフフって何だよ」

「何でもないニャンニャン!」

「ニャンニャンって何だ?」

「何でもな〜い〜ニャン!」

お寝坊な私の為にモーニングコールを入れてくれる約束だった彼に。

妄想の続きのままの気分で思いっきり甘えてみる。

でも、何だか様子がおかしい。

「元気だったか・・・？」

「何で？」

「まあ良いか。でも、何か安心した。」

「安心？」

「もう喋ってくれねえと思ってたからさ」

ギコチナイ会話と遠慮がちな言い回し。

何だか声も違う感じがする。

「電話して切られたらどうしようとかさ。マジ超々心配してさ」

「心配・・・？何で？」

「何・・・でって・・・。そう言えば、今電話してて大丈夫か？」

「大丈夫だよ？寝てるだけだから」

「寝てるって、どこか具合でも悪いのか!？」

「ううん？何で？もうそんな時間？」

噛み合わない会話に違和感を感じながらも子機を使用して続けた電話。

「ん？そんな時間って今5時だ」

「5時って・・・まだ外も暗いし朝も開けてないよ」

「ん？夕方のだぞ？」

「何言ってるの？まだ朝の・・・」

「寝ぼけんのか？今は夕方の5時16分だ」

「夕方？」

「夢でも見てんのか？目を開けろ。」

「夢？」

「つかさ。お前誰と喋ってるのか判ってるか？」

「誰と・・・？」

「俺は誰だ」

「アナタは・・・」

「誰と間違ってる？」

「間違っていないよ。だってアナタは・・・」

「アナタは？」

「あれ・・・布団の色が違う！一体ここは何所？何か覚えがある・・・」

「マジで寝ぼけてんだろ。そこはお前の実家って言うか今住んでる家！」

「嘘・・・？」

「嘘ついてどうなる。お前の名前は川嶋優奈」

「そうだよ？何言ってるの？」

「まだ起きねえのか？一体どんな夢見てたんだよ」

「夢・・・？」

「じゃあ質問を変える。今何してた」

「何って寝てて・・・で、電話がかかってきて・・・」

自分の中で現実だと思った事は全て夢。

ベッドに腰掛けて説明しようとした途端、私の意識が今の現状を受け止めた。

「YUIちゃん・・・？」

「誰だと思って喋ってたんだよ」

何所までが夢で。

何所から現実になったのか判らない。

恥ずかしさで、そのまま切ってしまいたいけど。

切ってしまったら、2度と繋がれない不安に襲われ。

「え・・・？YUIちゃん！？」

「そうだよ。待たせたな」

まだ寝ぼけてるふりで何度も聞きなおすけど。

あんなにかかって来たらと色々な設定で考えてた次の言葉は浮かばず。

涙が溢れ、2度と来ないと思ってたYUIちゃんの声に頭がパニック状態に陥った。

「バイバイ？」

「うん。バイバイ」

「バイバイって・・・」

「バイバイ！」

本当は切りたくない。

でも上手く言葉が出てこない。

「今日はバイバイって事か？」

本当は切りたくないのに。

「永遠について事か？」

このまま終っちゃうかもしれないのに。

違うと一言頑張って声に出したつもりだったけど。

涙が邪魔してか。

何故か声にならなくて。

「だよな……。そうだよな。遅いよな」

その言葉を最後にYUIちゃんも何も言わなくなった。

熊と白鳥に踊った日(3)

この時間が。

「じゃあ……。お前から電話切ってくれねえか」

きっと2人繋がってる最後の時間。

「何かさ……。俺から切れねえって言うか。フラレタ方が後引きズラねえ気がするし」

無言の時間に堪えかねたようにYUIちゃんが言った。

切ったら終わり。

ただ突然の事にパニックして声が出ないだけなのに。

気付いてくれない事が悲しくて余計に涙が溢れてくる。

1回目。

2回目。

受話器から深い溜め息が聞こえる度に募る焦り。

「一言ぐらい何か言えよ」

こんな大事な時に、何故か声が出ない。

私の気持ちと正反対に今全てが終ろうとしている。

3回目の溜め息に、切られると覚悟してふいに目を閉じた瞬間。

YUIちゃんとの思い出が頭を駆け巡りだした。

初めて出会った日の事。

笑ったり拗ねたりした事。

初めて自分が女の子に生まれて来て良かったと思った日の事。

世の中で1番嫌いだと思ってるお母さんが、自分のお母さんで良かったと思った日の事。

家族が居てくれて良かったと思った時の事。

全部、全部YUIちゃんが教えてくれた事。

絶対にこのまま終りたくない！

これからも。

ずっとYUIちゃんと一緒に居たい！と心に強く思ったと同時に。

「……泣いてるのか？」

鼻をすすった音が聞こえたのか、YUIちゃんがやっと気付いてくれた。

今、頼れる物は神様でも仏様でもなく。

私に残されたのは鼻水をすすする音だけ。

深く限界まで息を吐いて。

恥を捨てた分まで願いを込めて。

終りたくない一心で受話器に向って思いっきり鼻水をすすり上げ息を吐いた途端。

「うん・・・」

間高くて震えた変な声だけど、やっと声が出始めた。

「・・・終わるか」

「んゝ!!」

「どっちだ」

「ニヤっ!」

「ニヤって何だ?」

「えっ!・・・っと!。あ・・・っと!あの」

「もしかしてさ。お前泣き過ぎで声出ねえんだろ」

「うんっ」

「そっか・・・」

「んっ！」

「・・・そっか・・・」

「んっ・・・うん！」

「そっか・・・。」

「うんっ！」

「よし！判った！じゃあ。何にも言わなくて良いから。つうくか」

「・・・？」

「優奈」

「・・・」

「優奈？」

「っん？」

「優奈！」

「うん！」

「優奈！」

「はい！」

「優奈！」

「・・・ニヤ？」

「いや・・・。何でもねえよ」

「ん・・・？」

「ただ。名前呼びたかったただけだ！」

「ん・・・？」

「よっし！じゃあ。夜10時になったら今度は携帯に電話するからよ」

「な・・・」

「どうした？」

「名前」

「名前？」

「呼びたか・・・っただけってっ」

「別に良いだろ」

「良くない・・・」

「だー！！判ったよ！じゃあ言うよ！だから、その・・・ずっと心配でさ・・・。不安でさ。その・・・」

「その・・・？」

「本当に俺。お前の事好きだからさ・・・」

「・・・」

「そう言う事だ！判ったか！」

「・・・」

「返事ぐらいしろよ」

「うん」

「おっと！じゃあ、ちゃんと出るんだぞ」

「おっと？」

「絶対だぞ！」

「うん！」

「約束だからな！じゃーな！」

次の電話の約束をして、急ぐように切れた電話。

YUIちゃんが、私の事を思ってくれてたのは伝わったけど。

変な返事ばかりで。

私の気持ちなんて、これっぽっちも伝わってない。

嬉しくて。

嬉し過ぎて。

「イエーイ！！！！！」

今、叫びながら我を忘れて踊ってるなんて。

飛び跳ねるほど喜んでるなんて絶対に伝わってない。

「ちょっと優奈！何ドツタンバタンやってんの！」

「ダンス！ダンス！ヒュー！！！」

「ちょっと何それ！そんなのはダンスって言わないのよ？良い？ダンスって言うのはねえ」

「何それ！」

「ジャズダンスよ！ほら！手はこう！腰はこう！」

「ちょっと！くすぐったいよ！そう言えば、お母さん機嫌悪かったんじゃないの？」

「そんなのぶっ飛んだわよ！出会ってしまったのよ！」

「出会ったって誰に？」

「ジンハ様と違って、本当に地上に舞い降りた天使みたいなお顔を
してるのよ！」

「にしても、どんな音楽でそのダンスしてるの？」

「ヒップホップとか何でもあるわよ？」

「ヒップホップ！？盆踊りみたいだよ？」

「失礼ね！じゃあ、ちょっと手拍子してちょうだい！そう！そんな
感じで！」

「姉ちゃん達何してんの？」

「ほら！裕貴何か歌いなさい！」

「え？何で？」

「何か気分が乗って来ないのよ！ほら。何かこの動きに合うヤツ！」

「これに合う歌？」

「そう！早く！優奈も手拍子止めない！」

「そんなの思いつかねえし」

「もう！本当に想像力のない子達だね！良いわよ！お母さん自分で歌うから！」

「何を？早く歌って下さいよ」

「煩いわね！今何が合うか考えてるところなのに！」

「何だっけ。あれで合うんじゃない？家電の着信」

「森の熊さん？そんなの合う訳ないじゃない！」

「そっか？あゝるゝ日。ほら。合うじゃん」

「森のゝ中。ん？本当に何か合うんじゃない？」

「熊さんに」

「出会った。ほゝい！ほい！」

「ほいって何！」

「優奈も笑ってないで、ちょっと立ちなさい！ほら一緒に回るわよ！花咲く森の道」

家電の着信音「森の熊さん」

「裕貴もほら！姉ちゃんの後ろに来なさいって！」

「何でだよ！マジ勘弁！」

何度も3人で合唱して。

手拍子して。

「何アンタ達！若いのに本当に体力がないわね！お母さんね。昔バレーもしてたのよ」

疲れきった子供を残し、滑稽な1人白鳥の湖に何度もバカ笑いして。
嫌いで嫌いで仕方がない家族と。

昔、幼い頃に楽しく感じた日のような時間。

「優奈。油井さんの写真ないの？」

「何よ！突然！」

「あの人良い人ね。お母さん応援してるからね！」

「え？」

「ほら！逃さないように料理ぐらい出来るように仕込んであげるわよ！」

「え！？ヤダよ！」

「何言ってるのよ！女が料理ぐらい出来なくてどうするのよ！」

「母ちゃんの手料理って味噌汁以外、全部あそこの惣菜じゃん」

「そんな事無いわよ！ほら！優奈やるわよ！」

自然消滅したと思ってたYUIちゃんからの電話に。

これも。

あれも。

きっと何もかもYUIちゃんが運んでくれた幸せだと思った。

指輪の約束（1）

YUIちゃんが電話をくれなかったのは。

「話すと長くなるんだけど。携帯失くしちまってさ」

アドレス機能に頼ってメルアドも、携帯番号も判らなくて。

それが連絡出来なかった理由。

会う約束の2日前の打ち上げ中に紛失。

と言うよりは盗難。

「俺も聞いた事ぐらいだったし、自分がやられるとは思ってなかったからよ。」

「盗んでどうするの？」

「好きなメンバーの番号を知りたいとかさ。」

「そんな事する人いるの!？」

「うちのメンバー以外にも他のメンバーのアドも入ってるしき。世の中にはそういうヤツもいるからよ」

「誰か判らないの？」

「知らねえヤツの方が多かったし。気付いたのが、機材車で次に移

動してる最中だったからよ」

「居酒屋には電話したの？」

「ハイジってヤツわかるか？」

「エリゴンのお友達の人でしょ？」

「アイツに電話して探しに戻ってくれたけど、無くてさ」

「YUIちゃんが？」

「いや。篤が電話してさ。色んなヤツの携番知ってるからさ。」

「そうなんだ」

「あいつ等も俺ら追って、高速乗ってたのにさ。わざわざ戻ってくれてよ。」

「いい子だね」

「ああ。良いヤツ等だよ。俺らの中でも特別な存在だよ。」

ファンという人は。

人として疑いたくなるような事をする人もいる事を知り。

同じファンと一言で済ますには申し訳ない人がいる事も知り。

「実家に住んでるヤツとかだと家の番号も入ってるし。やっぱり迷

惑かけてねえか心配だよ」

「皆には連絡したの？」

「一応篤とかがメールしてくれてよ。今の所、何かあったとか連絡はねえけどな。」

「良かったね」

「でも、先輩のも入ってるし。やっぱり心配だしさ。気分的に、まじ参ったよ」

音楽と言うものがなのか。

それともバンドのメンバーだからなのか判らないけど。

人は誰かに恋をすると、時には犯罪と何も変わらない行動を起してしまう事を知り。

その事により、周囲の人間にも。

好きな相手の心にも不安と精神的苦痛を残す事を知った。

「で……さ。その……。」

「……その？」

「理由は判って頂けたでしょうか」

「……はい。以上ですか？」

「以上？」

「その……」

「何。」

「だから……。その……」

「お前は何かあのか！？」

「ないよ！？だから！これからも……」

「これからも？」

「……その……」

「俺は付き合っていたいと思ってるから、ちゃんと理由を説明したんだけど」

「本当？」

「本当だ。」

「本当に本当！？」

「本当に本当の本当だ。」

「じゃあ、本当に本当の本当で本当に！？」

「もう続けるなよ！本当だって言ってるだろ！」

「だって！だって！」

「だってじゃねえ。ハルガクル（8696）ってのは語呂合わせで憶えてたんだけど」

「ハルガクル？」

「下4桁ハルガクル（8696）だろ？」

「え！？」

「何！？違ったか！？」

「合ってる！」

「じゃあ！そんなに驚く事ねえだろ！逆に焦ったじゃねえか！」

「だって！いつもヤローに苦しむ（8696）って言ってたから！」

「そうだった！ハルガクルじゃねえよ。野朗に苦しむだった！」

一言一言。

言葉を交わすたび今まで離れていた時間が一気に埋まっていく。

日中の電話で、私の事を思ってくれてるのは通じたけど。

でも、まだ実際に本当の所が判らなくて不安な気持ちに緊張しまく

ってたのも解けたけど。

突然連絡が途絶えて悩み苦しみ泣き伏せた日々も一気に吹っ飛んでいくのは良いけれど。

「朝なんか、保留のまま放置されたし」

「・・・朝？」

「すっげえ低い声で出るからよ。俺マジでビビッたんだけど」

「何の事？」

「で、お前が母ちゃんに何か言われてさ。そのまま永遠に白鳥の湖聞かされてさ」

「え？ えっ！？」

「もうチャララララって未だに耳に残ってんだけど」

「あれってYUIちゃんだったの！？」

「おう。」

「本当に！？」

「本当だ。あっ！あれ切ったんじゃないからね。充電切れちまってさ」

「ずっと待ってたの？」

「出るかも知れねえから待ってたけど、切れちゃったからさ。かけ直しても話中だからさ。その・・・」

「その？」

「まだ喧嘩してんだろなってな！」

「やっぱり切る」

「何で!？」

「そんな変な所ばかり知られちゃって恥ずかしいし！」

「気にすんなって! ウッシッシッシ！」

「もう本当にヤダ! 気にするよ！」

我人生の中で。

世界一大好きな人に。

一番知られたくない自分を知られてた事を知り。

私だけをめがけて隕石が落下して木っ端微塵に消滅したくなるような気分。

「もしもし! 息してるか?」

「してます!」

「お？もしかして怒ってる？」

「怒ってないけど！」

「では恥ずかしくて死にそうってか？」

「そうです！もうどうして良いのか判らないよ！バカ！」

「愛いヤツじゃの。」

「ウイって何？」

「可愛くて可愛くて仕方がないってこった！！」

「もうー！からかわないで！！」

最初から、いつでも会えない2人。

住む町が遠すぎる分。

不安で堪らない時間があつた分。

携帯電話で繋がるだけでも幸せと安堵を感じる。

側に居れたら触れ合えるのに、会えない事が当然の恋。

最初から判ってたけど、やっぱり淋しい。

声が聞こえて。

思いも通じて時間も繋がっていて幸せだと感じる分だけ何かが必要なくなる。

「もう今すぐ抱きしめてキスしたいね!」

足りない物が何か判ってる。

今すぐでも欲しいのは、言葉じゃなくてリアルな温もり。

「首筋とか舐めた途単によ。急に大人しくなっちゃってエッチな声出すんだろぅなゝゝゝ」

「そんな事ありません!!」

「キスだけでメチャクチャに濡れちゃったりすんだろぅなゝゝ」

「もう! バカじゃないの!?!」

「パンティー越しに擦ったと単に、もう体ピクンピクンしちゃうんだろぅなゝゝ!」

言葉では思っていないふりをしてみたけど。

本当はYUIちゃんが言うとおりのままの事を今すぐにもして貰いたい。

特有なウッシシと声なく笑うその吐息を感じたい。

それ以上の事も。

それ以外の事も全部感じたい。

YUIちゃんの全部全部を体で感じたい思いで胸が切なくなってる。

「なあ……。」

急に改まって、低い声でささやかれると余計に子猫のように甘えなくなる。

「会いたかった? ……ほら! あの日一応会えたけどさ……。
顔見た程度じゃん。」

「うん……。」

「どっち?」

「会いたかったよ?」

「本当か?」

「本当だよ? すっごく、すっごく会いたかったよ?」

問われるまま。

正直に心そのままに言えたけど。

「マジでゴメンな」

「ヤダ。」

「は？」

「イヤダって言ったの!!」

「あ……。ゴメン。マジ悪かった」

「本当に本当に会いたかった！」

「ゴメン」

淋し過ぎて許せない。

思い過ぎて許したくない。

別に意地悪したい訳じゃない。

ただ会いたすぎて、大好き過ぎて。

その日の私の気持ちを全部知ってくれないと気が済まない。

「ちゃんとコンドームも準備してたし！」

「え？」

「え？じゃない！YUIちゃんが言ったんだよ？お母さんに嘘ついて泊まる準備もしてたのに！」

「ゴメン」

「ずっと、ライブハウスの前で待ってたんだよ？」

「マジか!？」

「すごい怖かったんだから! 暴走族は走ってるし! 警察が来たし!」

「大丈夫だったのか？」

「大丈夫じゃないよ! 偶然大人の人と居たから助かったけど。」

「大人って誰だよ。」

「知らない人! その人が朝までずっと一緒に居てくれたから助かったけど!」

「知らない人って男!？」

「そう! ずっと朝までYUIちゃんの事一緒に待ってくれたんだから!」

「はあ!？それってナンパされただけだろ!？」

「違うの! YUIちゃんの事待ってるのに怖くて。車の陰に隠れてただけど、その車の持ち主君で」

「ずっと待ってたのか!？」

「待ってたよ」

「携帯持ってるんだから、コンビニとか居れば良かっただろ！」

「だって、繋がらなかったんだもん」

「……」

「もしかしたら、YUIちゃんが戻ってきた時に居なかったら帰ったと思われるかもしれないでしょ？」

「だから、待ってたのか？」

「うん。怖かったけど……一緒に居てくれた人って瞬君って引きこもりみたいな人でね？」

「……」

「その日からずっと携帯で相談したりして元気付けてくれて。今は一番の大親友なんだけど」

「男なんだろう？」

「男って言っても女より弱そうな本当にモヤシみたいなんだよ。」

「そういうヤツに限って隙を狙ってんの！」

「いい子だよ？瞬君もバンドしてるんだけど、瞬君のおかげでYUIちゃんを待ってたんだよ？」

「？」

「ツアーもした事ないし、ファンも居ないから判らないけど。ツアーって疲れるし、売れると色々と忙しくて寝る時間もないみたいだって聞いた事あるからって。」

「ふーん……。そいつに言われたから、待ってた訳。」

「そう！じゃなきゃ、今頃他の恋を探してたもん！身も心もズタボロだったんだから！」

「ズタボロって……。何かすげえ責任感じるんだけど」

「何言ってるんですか。そうです！責任取って下さい！」

「いや……。何か、すっげえ重いな……。と。」

「責任は重いですよ！」

「責任取ってってよ……。何すれば良いんだよ。」

「じゃあ指輪買ってくれたら許す！」

「指輪？」

「そう！お菓子とかオモチヤのじゃないよ？2千円ぐらいでも良いの！その……。ほら……。」

「何急にトーンダウンしてんだよ。」

「だから……」

「恋人からってのが欲しいってか？」

「うん……。欲しい……。の。ダメ？」

「どんなのでも良いか？」

「良いよ！」

「じゃあ、ドクロのにでもすつか！」

「そう言うのじゃなくて！」

「判ってるって！冗談だ。良いよ約束する。もつとちゃんとしたヤツ買ってやるから」

「本当！？」

「おう！ってかさ。俺らメジャー行くかも知れねえんだ。」

「メジャー？」

「野球じゃねえぞ！デビューすっかも知れねえんだ。」

「すごい！おめでとう！」

「今、契約する事務所選んでる最中なんだけどさ……」

「うんうん！」

「デビュー決ったら安いだろうけど毎月ある程度給料も入るしさ」

「いつ!？」

「だから、デビューが決めて印税が入ってからだ!」

「早く決まると良いね!」

そんなつもりじゃなかったけど。

何となく流れと勢いで手に入れた【責任】という前書きが着いた指輪という約束。

付き合ってるなら当然のオネダリかもしれないけど。

彼女だと思ってるといわれても。

恋人と思って良いと言われても。

誕生日までは言い出せないと思ってた私が1番欲しいと思ってた物。

「明日も打ち合わせだし、早いと思うよ。ってか! お前誰にも言うなよ? まだ極秘なんだからよ!」

「大丈夫だよ! だって、誰とも連絡取ってないもん」

「エリゴンとか言うヤツもか?」

「うん。教えなかった。もう智子の時でコリゴリだから」

「そっか……。まあ、その方が色々な意味で良いかもな。女って急に変わるからな。」

指輪の事も。

極秘情報を教えてくれたのも。

自分がYUIちゃんにとって彼女という特別な存在だからしてくれる事。

今まで以上に深くて強い信頼的なモノさえ感じる。

「後でメルアド送るからよ」

きつともう離れない。

何があっても、もう大丈夫。

新しい携帯番号を知って何故か全てが約束された気になった。

「という事で。仲直りだな？」

「仲直り？」

「そう。俺達仲直りできたという事で、今日は切るわ」

「何か可愛い！」

「何が」

「だってYUIちゃんの口から仲直りなんて、可愛すぎる！」

「うるせえなあ。じゃあ他に何て言えば良いんだよ」

「判んないけど。では！仲なおりのチュウしよ！」

「チュウだあ！？糞して寝ろ！」

「良いじゃん！じゃあ私からするもんねー！」

「おいおい。バツカじゃねえの？今マジで携帯にチュウしただろ？」

「そうですよ。チュウチュウチュウ！YUIちゃんも！」

「絶対に俺はしねえぞ！？」

「お願い！1回だけ！してくれないと、明日からも頑張ってYUIちゃんの事信じられないよ。」

「……………じゃあ、1回だけだかな……………ほれ！聞こえたか！？」

「聞こえた！」

「誰も見えてねえから出来るけどよ。傍から見たらアホな光景だろうな」

「だろうね。」

「こんなのリアルに見ちまったら、俺顎外れちまうな。イヤ。スク

リームの面みたいになるな。」

「スクリーンって何？」

「ホラー映画のよ。黒いマントに白い面の」

「あゝ知ってる！叫び顔のヤツでしょ？私も弟がしてるの見たらなるなる！」

「まあ。また長くなるからさ」

「じゃあ、同時にチューしょ？」

「同時？」

「うん！そのまま切って良いから！じゃあ、オヤスミの・・・」

どんな映画か実際に見た事はないけど。

バラエティー番組の中で芸能人を脅かす仕掛け人として何度か見た叫び顔。

携帯を切って幸福感のまま激しい妄想に浸るはずが。

「ちょっと！？いつから、そこにいるのよ！」

「姉ちゃん・・・」

いつの間にか開かれた扉の前で私の事を見つめるまさにスクリーン
面顔の裕貴。

「何! ! 勝手に入ってこないでよ! 何か用でもあるの! ?」

「ちょっと! こんな夜中に大きな声出して! 優奈どうしたの?」

「私じゃないわよ! 裕貴がそんな所に居るから何って言っただけでしょ!」

「だって・・・姉ちゃんがさ・・・」

「見てたの! ? アンタ言ったら殺すよ!」

「何! 殺すって物騒な事言って! お母さんに言えないような悪い事でもしてたの! ?」

「別にそういう事じゃなくて!」

「恥ずかしさと何とやら。」

「必死に考えるけど、釈明もごまかしも全く浮かばないまま。」

「気持ち悪いモノ見てただけだから・・・」

「ちょっと裕貴! 優奈も自分の部屋だからって、もう少し家族の事を考えなさいよ! 裕貴本当に大丈夫? ふら付いてるじゃないの!」

「すぐさま災難は通り過ぎたけど。」

「YUIちゃんとの甘い時間を思い返す事もなく。」

翌朝どんな顔して食卓に下りれば良いのか。

そんなツマラナイ事で眠れなくなってた夜。

145.. 神怒剣 09/21 18..00 ID..jfg2
油の女って、トカゲとカウントの時に寝た1人でしょ？

146.. 神怒剣 09/21 19..48 ID..yesa
あの子はトカゲと寝てない。ホテル代カンパで知らずに連れてこられただけ。時が切れた時に全部聞いてたから事実。

147.. 神怒剣 09/21 19..54 ID..er34cw
時が切れたって何？詳細希望！

148.. 神怒剣 09/21 19..58 ID..2z4cx
147<知らない初心者はこちらに来るな！

149.. 神怒剣 09/21 20..01 ID..ni2sa
ギャでもピーでもない。ただの一般P。どこかのファンでもないから、神以外で見る事は不可能。

150.. 神怒剣 09/21 20..29 ID..ha78sy
にしても、ツアー後半油すごい機嫌悪かったよね。博多の時なんて、お疲れ様でしたって言っただけなのに蹴られたよ。

151.. 神怒剣 09/21 20..47 ID..sy6gw
149>別に可愛くもないし美人でもない。本当に普通の子だよね。
150>私も同じ日に入り待ちで蹴られたw 150さんが蹴られたのも見てたよ

1 5 2 .. 神怒剣 0 9 / 2 1 2 0 .. 4 9 I D .. h a 7 8 s y
所詮油の女。誰でも気にせん。

1 5 1 < 誰だか判った！何か嬉しいな！今度会ったら声かけてね！

1 5 3 .. 通りすがり 0 9 / 2 1 2 1 .. 3 0 I D .. p o u 4
r a

初めまして。その子は彼女ではありませんよ。

他のスレでも話題になってましたが、本命は別にいます。

本当の彼女は、その子の噂に大変胸を傷めてます。

勝手な想像で書き立てるのは止めて下さい。

1 5 1 .. 神怒剣 0 9 / 2 1 2 1 .. 5 7 I D .. b a 7 s o z
こういうガセネタ相手にするのもやめようね！

1 5 5 .. 神怒剣 0 9 / 2 1 2 2 .. 0 3 I D .. 2 z 4 c x i
1 5 1 ・ 1 5 2 > ちなみに札幌の打上げで、油に顔面撲られたのが
私です！いらっしゃいました？

1 5 6 .. 通りすがり 0 9 / 2 1 2 2 .. 2 9 I D .. p o u 4
r a

ガセネタではありません。

本当の話という事を皆さんに信じて頂くには時間がかかりますが。

きつと来月には誰もが私の話を信じてくれるでしょう。

また近いうちに現れます。それでは失礼致します。

1 5 7 .. 神怒剣 0 9 / 2 1 2 2 .. 5 7 I D .. a y k q 5 w
何か神登場を感じるんですが！

1 5 8 .. 神怒剣 0 9 / 2 1 2 3 .. 0 4 I D .. 2 a x j r f
ヤバスレになりそうじゃない！？

インターネットの掲示板という世界の中。

2人の知らない所で、黒く轟く何かが動き始めてた。

それはYUIちゃんと再び繋がった幸せだと思ってた日。

この日が全ての不幸の始まりだとは思ってもみなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0190j/>

disappear 2

2010年11月11日11時54分発行